

震災の教訓を次世代の子どもたちへ

主な内容：防災と人権について

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、6,400を超える尊い命が犠牲になりましたが、一方で、人と人とのつながりや支え合いにより、救われた命も数多くありました。しかし、震災から15年以上が経過し、震災を知らない世代も増えてきました。

命の大切さやボランティア活動の意義を理解し、安全で安心できる社会の実現に向けて、何が大切なのかを考えてみましょう。

●研究課題

(1) 災害に強い安全な地域づくりに向けて、何が大切なのかを話し合ってみましょう。

【ポイント】

- ・地域住民が取り組むべき課題について調べてみましょう。
- ・自分たちに何ができるのかを話し合ってみましょう。

(2) ボランティア活動について調べてみましょう。

【ポイント】

- ・ボランティア活動に参加するときの心構えや注意点について調べてみましょう。
- ・高校生が参加できるボランティア活動を調べてみましょう。

●活動課題

(1) 防災の視点から、地域を点検してみましょう。

【ポイント】

- ・家から避難場所までの経路やハザード（危険の原因・危険物・障害物）を調べてみましょう。
- ・調べたことをもとに、家族で話し合ってみましょう。

(2) 阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」などの施設を訪問し、震災の教訓を語り継ぐ取組をしている人にインタビューしてみましょう。

【ポイント】

- ・活動を始めた動機など、本人の思いや願いを聞いてみましょう。
- ・震災の教訓を語り継ぐために、自分にできることを実践してみましょう。

●ケーススタディ

県立舞子高等学校環境防災科の卒業生、筒井公美さん（震災当時4歳）が、在学中（平成20年度）に書いた手記（抜粋）を読んで、感想を話し合ってみましょう。

「震災からの贈り物」

一瞬にして全てを失った。

震災から13年が経ち、今では風化という言葉を目にするようになってきた。だが、震災で学んだこの想いや経験を、更にこれから語り継ぎ、継承し続ける事が大切である。決して風化なんてさせない。

私が覚えていることは、ほんのわずかな事だけだ。

なんでやろう？ 何であんな大きな地震があつて大変だったのに、何で、そんなに記憶がないの？ と小さかった震災当時の自分に少しあきれた。

私が、震災当時住んでいたのは、火事の被害が一番大きかった長田区だ。火の粉は垂水区まで飛んできたというほど、火事の被害が凄まじかったそうだ。

私は、今もその長田に住んでいる。

(中略)

ボランティアでいろんな所へ出て発表をし、いろんな経験をした。

その他にも、授業の一環として、小学生と一緒に安全マップ作りを出前授業で行った。今では、震災を経験していない子どもが増え、その怖さを知らない。だからこそ、子どもたちに防災の大切さを伝えていくべきだと感じた。

何よりも、阪神・淡路大震災で学んだ教訓を震災からの贈り物だと思い、無駄にしたいくはない。私たちのように防災を学んでいる人たちが、これから、もっともっと発信していくべきだと思っている。

(後略)

●チェック・シート

阪神・淡路大震災に関する知識をチェックしてみましょう。

- 地震の名称は、「平成7（1995）年兵庫県南部地震」である。
- 地震の規模は、マグニチュード 7.3、震度7（阪神間及び淡路島の一部）である。
- 震源地は淡路島北部、震源の深さは16kmである。
- 地震の特徴は、「都市直下型地震」である。
- 死者数は6,400名以上、負傷者は40,000名以上である。
- 家屋被害（全半焼壊）は、約250,000棟である。
- 避難所数は1,153カ所、ピーク時の避難者数は約317,000名である。
- 被害総額は約10兆円である。
- ライフライン復旧完了は、電気1月23日、都市ガス4月11日、水道4月17日である。
- ボランティア活動には、1日平均約20,000名（1月18日～2月17日）が参加した。

- 平成7（1995）年1月17日の阪神・淡路大震災で倒壊した高速道路
- 平成21（2009）年8月の台風第9号災害に際し、被災地で災害復旧ボランティアを行う高校生



（提供：県立佐用高等学校）



（提供：県立上郡高等学校）

キーワード解説

▼ 災害時要援護者

必要な情報を迅速かつ的確に把握し、災害から自らを守るために安全な場所に避難するなどの災害時の一連の行動をとるのに支援を要する人々をいい、一般的に高齢者、障害者、外国人、乳幼児、妊婦などがあげられている。なお、病人、旅行者のほか、例えば、災害で負傷した人、眼鏡などを失った人などもなんらかのハンディキャップがあると考えられ、災害時の状況に応じて柔軟な対応が求められる。このように、災害時要援護者の範囲については、必ずしも固定的、画一的にとらえられない面もある。

▼ 災害文化

自然災害と共に暮らしてきた経験や教訓をもとに、暮らしを守るために先人が遺した知恵や工夫、営みなどの集積であるもの。防災教育支援の基本的な考え方の一つに、「災害文化」の再評価・発展・浸透による新しい「災害文化」の構築がある。

▼ 県立舞子高等学校環境防災科

[平成14（2002）年設置]

阪神・淡路大震災の教訓を生かし、自然環境や社会環境とのかかわりを視点に据えて、人間としての在り方生き方を考える防災教育を推進するため、全国に先駆けて設置された。

▼ 震災・学校支援チーム(EARTH)

平成12（2000）年に結成された、防災についての専門的知識と実践的対応能力を備えた教職員チーム。他府県などにおいて震災などがあれば、その要請に基づき、被災地の学校の教育復興、被災児童生徒の心のケアなどを支援する。主な活動実績は以下のとおりである。

- 平成16年度 新潟県中越地震
- 平成17年度 スマトラ島沖地震
- 平成19年度 新潟中越沖地震
- 平成20年度 四川大地震
- 平成21年度 平成21年台風第9号災害

▼ 「ひょうご安全の日を定める条例」

[平成17（2005）年]

阪神・淡路大震災の経験と教訓を継承するとともに、いつまでも忘れることなく、安全で安心な社会づくりを期する日として、1月17日を「ひょうご安全の日」と定めた。

●関係機関等

- (1) 兵庫県ボランティア協会
- (2) 日本赤十字社 兵庫県支部
- (3) 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
- (4) 北淡震災記念公園（フェニックスパーク）

- <http://www.hyogo-vo.org/>
- <http://www.hyogo.jrc.or.jp/>
- <http://www.dri.ne.jp/>
- <http://www.nojima-danso.co.jp/aboutpark.php>